

我が街の宝物のような、キラリと光る企業や専門技術者を大切にするための前提条件  
- 我が社、我が街から失業者を一名も出さないために -

開倫塾  
塾長 林 明夫

## 1. はじめに

「我が街の宝物のような、キラリと光る企業や専門技術者」を大切に育て続けることが、我が街から失業者を一人も出さないための、次のテーマとなる。

1 ドルが110円ちかくなるとはいえ「超円高」と、賃上げはほとんどないといえ「世界最高水準の賃金」のため、いままでのやり方では雇用を維持できず、街中に失業者があふれ出す可能性がある。そのあふれ出す可能性のある失業者を吸収するために「新しいタイプの企業やそれを支える技術者」を、大切に育てることが必要となる。今回はその前提条件を考える。

## 2. 我が街の宝物のような、キラリと光る企業や専門技術者を大切に育てよう！

はじめに消極的なことを言って恐縮だが、台頭しつつあるキラリと光る企業や専門技術者の足をひっぱらないことがまずは大切だ。同業者で、直接お客をとられ、売上が減る場合はそんなことはいってられないかも知れないが、少なくとも自分の仕事に関係がないのであったら、我が街の宝物のような、キラリと光る企業や技術者は大切に、大切に育て、いやしくも「イヤミ」や「ネタミ」を言ったり、陰口をたたいたりしない方が我が街の失業対策上はよい。勉強をしつづけ、創意工夫を毎日のように行い、どんどんと力をたくわえつつあるそのような企業や専門技術者は、文字通り真剣勝負をしているので、街の人の「足ひっぱり」には敏感で、どんなささいなことでも何か言われたり、されたりすれば必ず覚えている。「足ひっぱり」は、いつか大きくなったらきっとこの街から出て行ってやる、という決意を固める直接の原因となる。

\* 開倫塾では現在140名余りの教職員をかかえ、キラリと光るとは言えないまでも、働く人の数だけで考えれば、少しは地域の雇用の維持に役立ちはじめたのではないかと、秘かに思っているが、今から10年以上前に人手不足で困っていたところ、あるところに求人の相談に行ったら「お宅のような小さな会社は・・・」と言われ、ものすごいショックを受けたことがある。又、あるところに経営上の相談に行ったら「塾のような水商売は・・・」と同じ人から、会うたびに10回以上言われつづけ、私が小心故か、言われるたびごとにいやな思いがしたことをよく覚えている。

\* アドバイスとしてなら、1回言って頂くだけで十分であることを何回も言われると、その相手だけではなく、街全体のイメージが悪くなり、その風景さえも見たくなくなるのは、企業経営者や専門技術者も同じである。言われたら足を引っばるような「イヤミ」や「ネタミ」にあふれた言動を、「我が街の宝物のような、キラリと光る企業や専門技術者」には決してしないことを、街中が心掛けよう。

積極的に「よくがんばっていますね。期待していますよ」と心から口に出して「ほめてあげる」「評価してあげる」とよい。

我が街の経済を活性化させ、そこに住む人々の豊かな生活を表現するという公約で当選した市町村長や議員の方々は、議会のないときには、我が街の宝物のような、キラリと光る企業や専門技術者を直接訪ねて、その会社の概要を直接聞き、評価に値すると考えたら、明確に「ことば」で「よくがんばっていますね。この街の将来のための、是非これからもお仕事を伸ばして行って下さい。この街の代表としてお願い致します」と述べてくるのが大切だ。

たとえ一人でも、選挙で当選した「公の人」から正式に評価されると、「では、今までにも増してがんばってやるか」という「気」も出てくるというものだ。（「選挙のときはよろしく」などと、あさましいことはそのときは絶対口にしないこと。選挙で協力してほしいければ、選挙運動期間中においてほしい。高く評価をされた側は「有難い」と感じているから、他の候補者よりは圧倒的に有利であることも付言させて頂く。）

「ほめてあげる」「評価してあげる」のは、別に選挙で選ばれた人でなくてもよい。自分の身近で「我が街の宝物のような企業や専門技術者」に接したら、「ことば」に出して、「よくがんばっていますね。素晴らしいですね。期待しています。」と言ってあげるとよい。言われた方は、自分が評価されたのであるから、気分がよくなり、やる気が出、ますます仕事に打ち込むようになる結果、業績も一段と伸び、雇い入れる人数も激増するというものだ。ときどきではあるがほめられることで、その街に対する愛着も増し、どんなに大きくなっても、その街にこれからもずっと本社機能を置き続けようという思いを深くすると考えられる。

とりわけ、街のなかに何千とある非営利組織の長や幹部の方は、「ほめる」「評価する」ことに徹すると、活力のあふれる街づくりの基礎ができる。

\* 話はそれるが、非営利組織のなかで新しく活躍しはじめた方々が何かやろうとしたら、「今までではそんなことはしたことがない。時期が早すぎる」などと言わないで、「面白そうだからやってみたら」と何でもやってみてもらおうとよい。「時期が早すぎる」というのは、「いつになってもやらない方がよい」という表現のあらわれ。「今まではそんなことをしたことはない」というのは、以前、「自分たちでやったこと以上によいことをされるとおもしろくない」ということの別の表現といえる。

「どのようにしたら会社を更に発展させることができるか」「専門技術を更にみがくことができるか」「我が街から失業者を一名も出さずにすむか」などのテーマで心のそこから長時間にわたる議論を自由にしつつけることに欠ける街が多いのではないか。

「難しい話」はめんどろでいやだと、避けてばかりいると、「難しい話」をする能力が失われ、しまいには「難しいこと」をする能力も、いつの間にか失われるからだ。

アルコールを飲めば自由活達に我が社や我が街の将来が語られるようであれば、我が街の活性化や発展はない。「難しい話はさておいて...」という人が多ければ多いほど、その街の没落スピードは早いといえる。

誰もが一寸先は闇で、不安の真っ直中にいるのであるから、こんな時こそ、夢を語り、励まし合い、ときには難しい内容も考えてみるとよいではないか。本格的な議論、自由な議論が会社中、いや街中至る所で行われているところだけが、今後伸びるのではないか。

通産省を中心とし、国や県、市町村が行いつつある「産業支援」政策なども、以上の内容とからめて行えば、本当に効果を発揮すると確信する。

### 3. おわりに

いくらキラリと光っていても企業や専門技術者は、あくまでも自らの「自助努力」「自己責任」で仕事をすすめるなければならない。

ただ、いくら「宝物」で「キラリ」と光っていても、しょせん人間であるので、すぐれた人ほど、仕事のしやすい環境に移りやすい。また、優れた人ほど評価をされればされるほど、その能力を発揮する。

少なくとも「街の宝物」のような「キラリと光る」企業や専門技術者を一人でも我が街から逃さないように、また、十分我が街を中心に能力を発揮してもらえるように、街中で支え合うことが大切だと思う。